

Title	UG 本質論
Author(s)	加曾利実
Citation	聖学院大学論叢, 21(2): 37-51
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=939
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

UG 本質論

加曾利 実

On the Essence of Universal Grammar

Minoru KASORI

This paper aims at revealing the essence of “Universal Grammar” (UG for short) from the viewpoint of interdisciplinary research, which implies that the true state of UG can be obtained through various points of light shed on this issue. One of the most crucial viewpoints is the hypothesis that human linguistic capacity is acquired and, at the same time, functions through Saussurean “langage”.

Key words: Universal Grammar (UG), Typology, Langage, Language Acquisition Device (LAD), Libido

目次

- I. 緒 言
- II. UG の定義
- III. UG 本質論
- IV. 結 語

~~~~~

## I. 緒 言

現代言語学の研究目的には、様々なものがあるが、その一つに、「言語の普遍性についての研究」がある。本論文は、その普遍性についての一試論である。これは、現在、一般的には、普遍文法 (Universal Grammar, この後 UG と略す) と呼ばれていることが多い。特にチョムスキーによる、生成変形文法の展開によって、UG が広く知れ渡るようになった。しかし、ソシュールなどの構造主義的見解や、近年、大きく発展した大脳生理学、心理学などの研究の下に照らして見ると、UG について、別の解釈が可能であるように思われてならない。本小論が、UG 研究について、より詳細かつ学際的に考究する一助になることを望んでいる。

## II. UG の定義

言語に関する普遍性についての論議は、学者の研究領域によって異なり、実に様々な定義が与えられている。今回、その中で特に重要と思われる定義を6つ挙げ、学際的にその定義を考えてみることにする。

- 1) グリーンバーグの定義 (言語類型論)
- 2) チョムスキーの定義 (生成変形文法)
- 3) ソシュールの定義 (構造言語学)
- 4) フロイトの定義 (心理学・精神分析)
- 5) 分子性言語学の定義 (大脳生理学)
- 6) CS 理論の定義 (比較統語論)

それでは、これを一つ一つ見ていこう。

### 1) グリーンバーグの定義 (言語類型論)

一般的に、「言語の普遍的法則」を追究するための類型論 (typology) は、グリーンバーグ (Joseph H. Greenberg) の研究が先駆的であると言われている。これは、後のチョムスキーを代表とする生成変形文法の UG に引き継がれていくこととなる。

グリーンバーグは、世界の30の言語をサンプルとして選び、45に及ぶ言語の普遍的特性、即ち「言語普遍性」を導き出し、世界の言語を理論上、次の6つの類型に分類した (石黒など1996年: p. 51)。

表1 グリーンバーグによる6つの言語類型

|     |     |     |
|-----|-----|-----|
| SVO | SOV | VSO |
| VOS | OSV | OVS |

この中で、VSO の言語を Type I, SVO の言語を Type II, SOV の言語を Type III と称した。この理論で重視しているのは、「語順」である。確かに世界言語における共通特性つまり普遍性についての考察と看做せるが、同時に、類型論は、「普遍性と特殊性の理論」でもある。つまり、言語間同士で、どの言語群が共通し、どの言語群が異なるのかを問題とするので、純粹に「人類共通の能力」を問題としているわけではない。つまり、これをソシュールの述べる、langage (ランゲージュ) ではなく、parole (パロール) や langue (ラング) の領域の問題なのである。従って、本小論の主

題は、UGであるので、類型論については、これ以上触れないこととする。

## 2) チョムスキーの定義 (生成変形文法)

これに対して、チョムスキー (Noam Chomsky) のUGは、いささか趣を異にする。そもそもチョムスキーの生成変形文法は、言語間に見出される類似性についての研究というよりも、「人間言語に普遍的に存在する共通特性」を追究する。現代英語学では、次のように説明されている (石黒など1994: 104)。

子供が周囲で話されている不完全な文や誤りに満ちた発話を資料にして自然に母国語の文法を習得するのは、子供が生まれながらにして人間の言語の文法は、こうあるべきであるとか、人間の言語の文法は、このような条件や制約に従わねばならないとか、そういうことを (無意識に) 知っているからである<sup>と考える</sup>。生成変形文法の大きな目標は、こうした、人間言語に共通する普遍的な条件・原理・制約を明らかにすることである。 (下線は、筆者による。)

チョムスキーによると、「人間が生得的に持っている言語の素をLAD (Language Acquisition Device) と呼び、そのLADは、言語の素にあたる普遍文法UGと個別言語を規定するパラメータ (parameter) から成る」としている。このように、生成変形文法の目標は、「人間言語に共通する普遍的な条件・原理・制約を明らかにすること」とする。しかし、彼の理論には幾つか重大な問題点があるように思われる。それは、次の2点である。

- ①句構造変形規則などを代表として、 $S \rightarrow SVO$  と一般化するなど、これでは、個別文法であり、到底、普遍文法とは呼べない。
- ②言語の「個人能力」の面だけを研究し、言語にとって最も重要な特性である「社会性」の視点が欠如している。

特に、②の社会的視点が皆無なのは致命的である。私は、言語研究において、社会的視点の有無は、その理論の妥当性を決すると考えている。私見に過ぎないかも知れないが、チョムスキーの理論を見ていると、まるで「理科学者が観察室から実験動物を観察している」かのような印象を強く受ける。

## 3) ソシュールの定義 (構造言語学)

人類の言語に共通する、普遍的能力について、最初に定義を行ったのは、実は、グリーンバークでも、チョムスキーでもない。スイスの言語学者ソシュール (Ferdinand de Saussure) である。彼

は、この能力に langage (ランガージュ、小林英夫氏は、これを「言語活動」と訳した) という名をつけた。つまり、parole (パロール) と langue (ラング) を生み出す能力として langage を位置づけているのである。ここで、特に、大切な点は、ソシュールは、チョムスキーがその研究対象を「個としての人間の言語能力」と限定する見解とは異なり、「言語の社会性」に着目したことである。例えば、ある言語が標準語・共通語と法律などで規定されるか否かは、全てその言語が用いられる国の政治、経済、地理、文化等の社会的要因により決定されるわけで、その言語自体が有する特性によって決定されるわけではない。言語を生きたままの姿で観察し、言語を社会的観点から研究したのである。ソシュールは、ランガージュを次のように定義している (ソシュール 1975 : 21) (Saussure 1995 : 25)。

言語活動 (langage) は、全体として見れば、多様であり混質的である。いくつもの領域にまたがり、同時に物理的、生理的、かつ心的であり、なおまた個人的領域にも社会的領域にも属する。それは人間事象のどの部類にもおさめることができない。その単位を引き出すすべを知らぬからである。…言語活動の行使は我々の生まれながらの能力に基づくのに引き換え、言語 (langue) は、習得したもの・制約的なものであって、生得本能の下位に立つべきであり、上位を占めるものではない。 (下線は、筆者による。)

また、ソシュールは、langage を次のようにも定義している (丸山 1995 : 174)。

ランガージュは、人類を他の動物から区別するしるしの一つであり、人類学的な、あるいは動物学的な性質を持つ能力である。…人間は、たとえば歌う能力を持っているが、社会共同体が曲を作るように仕向けてやらないと、彼は一つも曲を作ることはないだろう。 (下線は、筆者による。)

ここで言う「歌う能力」は、「音楽の能力」と考えた方が自然である。更に、丸山氏は、これを受けて「ランガージュという能力を行使できるためには必ず何らかの言語 (社会) 共同体に属している必要がある」と結論付けている。この解釈には、全く同感である。言語から社会性を除いたら、何も残らないと言っても過言ではない。

ところで、ソシュールは、よく「構造主義 (structuralism) を提唱した構造主義者 (structuralist)」と呼ばれることが多いが、実際には、ソシュール自身は、「体系主義 (systemism) を主張した体系主義者 (systemist)」であったと言える。事実、ソシュールは、ほとんど「構造」という用語を用いずに、「体系」という概念を用いている (丸山 1995 : 178)。これは、ソシュールが、言語という存在に「構造」という「非有機的な死んだ組織体」ではなく、「体系」という「部分組織同士が相

互に関連し合いながら、有機的に結びつきあって、一つの生きた全体を成す生体」として見ていたからに他ならない。即ち、言語すなわち人間存在そのものを「死んだ無機的で孤立した固体」ではなく、「生きていて、絶えず変化する、有機的で社会的な生物」と捉えていたと考察できる。

#### 4) フロイトの定義 (心理学・精神分析)

いささか唐突に見えるかも知れないが、このソシュールのランゲージュを精神分析の立場から説明しようとしたのが、フロイトであると私は考える。

フロイト (Sigmund Freud) は、オーストリアの精神医学者で、人間の心理生活を、下意識または潜在意識の領域内に抑圧された性欲衝動 (libido リビドー) の働きに帰し、心理説明の手段として精神分析の立場を創始したことで有名である (広辞苑第五版)。「南山堂医学大辞典第19版」は、このリビドーについて、次のように説明している。

精神分析理論において仮定される心理的エネルギーに関する理論。フロイト S. Freud は、性欲動の根底にあるとされる心理的エネルギーの一形態を物理的なエネルギーになぞらえてリビドーと呼んだ。本能衝動としての性欲は、リビドー的衝動 libidinal drive と呼ばれる。…フロイトはこれらのタイプによる性格の分類を試みた。 (下線は、筆者による。)

更に、フロイトは、人間の心理構造を「エス、自我、超自我という3つの領域」に分けて考察している。ここで重要な点は、エスである。エスは、イド id と《同義語》である。同じく、「南山堂医学大辞典第19版」には、次のように出ている。

フロイト S. Freud は、構造論において心をエス、自我、超自我という3つの領域に分け、エスから自我および超自我が分化し形成される過程を論じた。「精神分析学概説 (1940)」では、エスについて「遺伝するもの、生来的なもの、体質にそなわるあらゆるものを含んでいる」と述べている。エスは、リビドー libido と攻撃性という2つの本能衝動の心的表象を包含する。その内容は無意識的であり、直接には意識化されず、類推することが可能であるにすぎない。フロイトはエスについて、快感原則に支配され、一次過程の心理にのっとり、自由に動くエネルギーをもつことなどを仮定した。また、まとまりや方向性をもたない、「混沌」であることを特徴としてあげている。エスは心的エネルギーの貯蔵所であり、自我や超自我もそのエネルギーを利用し、自我や超自我との間で葛藤を起こすこともある。フロイトは、エスと自我の関係を、奔馬とそれを制する騎手にたとえている。 (下線は、筆者による。)

「精神医学事典」(小此木 啓吾氏の解説)は、リビドーについて、より明解な説明を加えている。

## UG 本質論

フロイト S. Freud (1894) が用いた性エネルギーの概念。リビドーとは、快感、欲求、感覚的快感追求などの意味であるが、フロイトは1894年に初めてこの言葉を用い、それを19世紀的な物理化学の理論（エネルギー恒存の法則）に立脚して、エネルギー論的に概念づけた。さらに1905年になって、より明確な定義が得られたが、それによれば、リビドーとは、人間が生得的に備わった本能エネルギーであって、発達とともに成熟する。フロイトの幼児性欲論によれば、リビドー発達は、口愛期、肛門愛期、男根期、さらに、思春期の性器期へと発展するが、それぞれの段階に対応する快感刺激帯（性感帯）、充足の目標、充足の対象をもつ。しかし、同時にリビドーは精神エネルギーをも意味する。リビドーは、エロス (Eros) のモルティドー (mortido) およびデストルドー (destrudo) はタナトス (Thanatos) の、それぞれのエネルギーまたはカテクシス (cathexis) の現れである。さらにリビドーはエネルギー恒存の法則に従い、直接満足によって充足を得て解消するか、昇華によって間接的に解消される。…さらにフロイトは、リビドーが自己に向けた状態を自我リビドー (ego libido)、自己愛 (narcissism)、自己以外の対象に向けた状態を対象リビドー (object libido)、対象愛 (object love) と呼んだ。なお、リビドー (libido) というこのラテン語は、A. モル Moll (1898) によって性的衝動 (sexual urge) という意味で用いられていた。（下線は、筆者による。）

しかし、リビドーの解釈で最も重要な学者といえ、やはりユングを出さねばならないであろう。ユングは、リビドーの解釈でフロイトと決別した学者で、その思想は、示唆に富む（心理学辞典 2001）。

ユング (Carl Gustav Jung (1875-1961)) は、スイスの精神科医で分析心理学の創始者。自らを魂の医者および、まさに魂の医者として生涯を送った。1900年にバーゼル大学で医学を修めた後、プロイラーやジャネの指導を受ける。1907年に S. フロイトと出会い、11年には彼の推薦で国際精神分析学会の初代会長となるが、12年にフロイトとは相容れない独自の見解を「リビドーの変遷と象徴」に著したことで二人は訣別する。その後激しい精神的苦闘を経て、彼独自の「分析心理学」を確立した。両者の相違はフロイトの関心がおもに神経症にあり、ユングのそれが精神分裂病であったことにもよる。ユングは、無意識を個人的無意識と人類に普遍的な集合的無意識に分け、無意識の内容として抑圧された性的なものだけでなく、創造的なものをも認めた。1930年前後に分析心理学の基本的体系を確立し、以後これを発展させた。1948年にユング研究所がチューリッヒに設立され、現在も研究が続けられている。（下線は、筆者による。）

つまり、ユングによる「リビドー解釈」は、人間のあらゆる行動の根底にある心的エネルギーの

ことであり、「生命力」と同意語と考えているのである。ここで注目すべき事柄は、次の2点である。

- ①無意識を「個人的無意識」と「人類に普遍的な集合的無意識」に分けた。
- ②無意識の内容として「抑圧された性的なもの」だけでなく、「創造的なもの」をも認めた。

以上のことを纏めると、次の仮説が可能となると思われる。

[仮説]: フロイトの理論に欠如している理論は、人間エネルギーの「言語特性的側面」であり、libido と language との相互関連性もしくは、その同一性を証明することにより、人間存在のよりの確かな実像を捉えることが可能となるのではないか。これをより端的に述べると、フロイトの libido という人間生命・性エネルギーが、言語的に表出した側面が、ソシユールの言う language と言えるのではないであろうか。言語を表現するときに生ずる、ある一種のもやもやとした感覚は、この性エネルギーによるものではないであろうか。つまり、libido という巨大精神エネルギーの一部を言語的に昇華する場合、language が使用されて、発動することになる。language は、libido の一部と看做すことができる。逆に、libido の一発露を language と看做すことが可能であろう。

ユングが主張するように、libido は、「生命力」と考えられる。つまり、生命エネルギーもしくは性エネルギーから言語エネルギーへと昇華する、いわばエネルギーの源泉として見ることはできないであろうか。これを次のように図示できる。

生命エネルギー → 性エネルギー → 精神エネルギー → 言語エネルギー

図1 エネルギーの相互関係

## 5) 分子性言語学の定義 (大脳生理学)

近年の医学および心理学の発達には、目を見張るものがある。人間の精神活動・言語活動を現代科学の立場では、どのように見ているのであろうか。まず、大脳生理学的な観点から考察してみる。

中でも、分子性言語学 (molecular linguistics) は、歴史のある分野で、相当以前から言語活動を副腎皮質ホルモンを代表とする「一種のホルモン活動」と定義している。大木氏 (1981: 16-17) は、次のように述べている。

ホルモンの正しい意味は、ケミカル・メツセンジャーである。体内の細胞が必要に応じてこれを分泌し、これによって他の細胞へ情報を伝え、この細胞を活動させるものであって、多



細胞である動物が生きてゆくための根源となる物質であり、分子である。さらに言えば、動物的行動すなわち本能の源泉となる重要な物質であり、最も進化した動物である人間精神の源泉にもなる重要な物質なのである。それが、たまたま性ホルモンが性現象を支配していたために、一般の興味をひき、偏って理解されてしまったのである。…ホルモンの本質とは何かを考えてみよう。単細胞の微生物が進化して多細胞の動物になった場合、その体内で、各細胞が互いに緊密な情報交換をおこない、全体として一個の動物としての活動を間違いなくおこない、行動していけるようにすることが必要である。そのための細胞間の連絡用の基本的に重要な情報伝達物質がホルモンという分子なのである。（下線は、筆者による。）

更に、大木氏は、次のようにも述べている（1981：182-183）。

…人間の脳の精神活動の最大最高の特徴である創造性について一言触れておきたい。どうして人間だけに、他の動物にない創造性がある、文明、文化を築いたのであろうか。…二つのことが言えると思う。

一つは、度々のべたように、人間だけに脳が奇形的に巨大化し、最後に脳左半球が非対称的に過度に発達し、言語中枢ができ、抽象化ができ、理性的活動ができるようになったことである。

そして、第二は、この余剰脳による有髄神経のデジタル型コンピュータのすみずみまで、広域分布の無髄神経がからみ、ペプチドホルモンが分布していることである。このため、デジタル型コンピュータといっても、常にアナログ型の環境にあって、そのムードと、総和による閾値（いきち 広辞苑：①ある系に注目する反応をおこさせるとき必要な作用の大きさ・強度の最小値 ②生体では感覚受容器の興奮をおこさせるのに必要な最小の刺激量。しきいち。限界値。）によって左右され、試行錯誤が繰り返されているのであろう。この試行錯誤こそ、人工のコンピュータにはできない創造性の原因となると考えられる。

そして、このように考えれば、人間の脳で精神活動ができ、創造性が発揮される根底的原因は、水溶液系という全くアナログ型の環境の中に、巨大なデジタル型のコンピュータが矛盾なく組めたことであろう。このコンピュータの完成、すなわち髄鞘化（ずいしょうか）は生後おこなわれ、その完成に応じて教育が逐次おこなわれ、その結果、偉大な創造性が発揮できるようになったのであろう。（下線及び広辞苑による「閾値」の説明は、筆者による。）

この文章の中で、とりわけ重要な箇所は、最後の文章である。「髄鞘化は生後おこなわれ、その完成に応じて教育が逐次おこなわれ、その結果、偉大な創造性が発揮できるようになった」のくだりである。ここで、「髄鞘化と教育の重要性」が述べられている。髄鞘化は、発達心理学などでもよ

く知られている。ここで、髄鞘とは、分子生物学的研究で言われるもので、南山堂医学大辞典第19版には、「神経線維 nerve fiber の内では有髄線維 myelinated fiber といわれるものでは、神経細胞（ニューロン neuron）の突起である軸索 axon は髄鞘 myelin sheath によって包まれている。髄鞘は、またミエリンとも呼ばれる」と説明されている。神経線維は、1本1本が髄鞘という絶縁体で隔てられており、その髄鞘が無いと、神経軸索での活動電位がうまく伝わらない（本庄 1999 : 100）。まさに、この髄鞘こそが脳の活動、特に精神活動の源泉となっているのである。大木氏は、次のように続ける（1981 : 192）。

人間精神を作った原点を分子レベルで求めれば、神経細胞を作った電線（神経線維）の神経膜と、その効率を倍々増した絶縁被覆髄鞘にあるということになる。そして、神経膜は生体膜の一つで、脂質二重層で作られ、さらに、これを絶縁する髄鞘は、この二重層の多層である。

ここで、最も重要なことは、「胎児期後半から乳児期にかけて次第に出来上がっていく髄鞘」である。この過程を「髄鞘化」と呼ぶ（新井 2007 : 84）。髄鞘化は、前頭連合野では、20歳ごろまで続くという説もある（中村 2007 : 22）。

私は、まさに、この髄鞘化こそ、ソシュールの主張する、人間発達初期における「langage による parole 獲得の段階のこと」であり、フロイトの「libido の根源」に他ならないと考える。

## 6) CS 理論の定義（比較統語論）

CS 理論（Comparative Syntax）は、私が、32年前に始めた理論である（Kasori 1977）（加曾利 1980）が、紙面の都合から説明は割愛する。CS 理論では、コンピュータ言語学的手法も用いる。以前、プログラミング言語の一つの BASIC を用いて、階乗列のプログラムを作成したことがある（加曾利 1985）。しかし、年月が経ち、以前作成したプログラムは、現在のコンピュータでは、ほとんど使用不可能になってしまった。また、最近のコンピュータは、その性能・機能が、以前のコンピュータとは比較にならないほど高性能・高機能となった。そこで、現在、主流である OS の Windows 上で走らせることのできる BASIC で、階乗列をプログラミングできるものを探してみたところ、たった一つだけあった。それが、今回、紹介する「電脳組の BASIC/98 Ver. 5」である。

実際、Windows 上で走らせることのできる BASIC は、フリーソフトも含めて、多々ある。しかし、実際に、プログラミングしてみて、他の BASIC では、最も重要なコマンドが欠けていることが判明した。それは、DEFSTR のコマンドである。DEFSTR のコマンドは、文字列を扱うためのコマンドである。これが無いと、文字列を扱うことができない。そこで、色々と各 BASIC でプログラミングしてみて調べた結果、BASIC/98 Ver. 5 だけが、DEFSTR のコマンドが使用可能な BASIC で、

私のプログラムが動作する唯一のものであった。今回、このソフトを用いて、「7の階乗列自動生成プログラム」を作成した。

プログラムを紹介する前に、なぜこのプログラムを作成したか、その理由を述べておく。私は、ソシュールの主張する、langage の能力は、いわば「文字の階乗列自動生成プログラム」のようなものであると考える。人間が、様々な語順からなる、世界のいかなる言語も習得可能なのは、脳の中に「いかなる語順の文字列をも受け入れることが可能なシステム・プログラム」が存在するからではないであろうか。その「いかなる語順」とは、「階乗列そのもの」ではないかと思われる。即ち、UGの本質とは、「乳児期、周囲の環境要因である父母などの parole が刺激となって、髄鞘化と共に langage が機能し初め、様々な単語を語順の中で記憶し、個別言語 langue が要求する特定語順を、langage の階乗列より選択して言語化・人間化し、さらに、学校教育によって、“自己の parole” を創り出す（自己発見・自己実現）ための、生命の営み・過程」と言えるのではないであろうか。ここで、注意しなければならないことは、この langage は、乳児期だけの機能ではないということである。特定言語の選定（髄鞘化）という点では、乳児期（か20歳位とする説もある）までかもしれないが、無意識の深層心理構造では、langage は、終生機能し続けるのである。

それでは、そのプログラムを紹介することとする。これは、「7の階乗列（5,040通りの語順）を自動生成するプログラム」であり、BASIC/98 Ver. 5で実動可。結果を印刷するには、330行目の PRINT 命令を LPRINT に変えればよい（戸川 1998）。S, X, V, O, C, Mp, Mt などの7つの品詞構成要素を語順とした場合を想定したものである。各記号は、S=Subject, X=Auxiliary Verb, V=Transitive Verb, O=Object, C=Complement, Mp=Adverbial Modifier for Place, Mt=Adverbial Modifier for Time を意味する。プログラムを起動し、input 命令で、記号を入力すれば、5,040通りの語順を自動生成する。尚、階乗を現代科学の立場で一般化して説明すると、現代物理数学でいうところの「 $\Gamma$ 関数」のことである（涌井など 2005: 173）。

#### [7の階乗列自動生成プログラム]

```

10 CLS
20 DEFSTR J-Z
30 GOSUB 260
40 FOR A=1 TO 7
50 FOR B=1 TO 7
60 IF B=A THEN 230
70 FOR C=1 TO 7
80 IF (C=A)+(C=B) THEN 220

```

```

90 FOR D=1 TO 7
100 IF (D=A)+(D=B)+(D=C) THEN 210
110 FOR E=1 TO 7
120 IF (E=A)+(E=B)+(E=C)+(E=D) THEN 200
130 FOR F=1 TO 7
140 IF (F=A)+(F=B)+(F=C)+(F=D)+(F=E) THEN 190
150 FOR G=1 TO 7
160 IF (G=A)+(G=B)+(G=C)+(G=D)+(G=E)+(G=F) THEN 180
170 GOSUB 310
180 NEXT G
190 NEXT F
200 NEXT E
210 NEXT D
220 NEXT C
230 NEXT B
240 NEXT A
250 END
260 REM -sub 1-
270 FOR H=1 TO 7
280 PRINT H;"banme no go wa,":INPUT S(H)
290 NEXT H
300 RETURN
310 REM -sub 2-
320 I=I+1
330 PRINT I;" ";S(A);" ";S(B);" ";S(C);" ";S(D);" ";S(E);" ";S(F);" ";S(G);"."
340 RETURN

```

上の階乗列自動生成プログラムで、品詞構成要素を7つにした訳は、これが人間の一般的日常会話・文章表現に用いられる「文法的言語構成要素」の最大リミット数と考えたからである。尚、7つよりも多くの構成要素が必要な場合には、このプログラムを書き直せば、容易に新たな階乗列自動生成プログラムを作成することもできる。

### Ⅲ. UG 本質論

以上の理論から、UG を語順確定以前の「語順獲得能力」と定義できる。では、どのような言葉が、S, X, V, O, C, Mp, Mt などの文法的品詞になるのであろうか。その内容決定因子は、それぞれ「恣意的」であり、言語によって異なる。

それでは、次に「ランゲージに全く文法性は無いのか」という問題が生ずる。その答えは、否である。「品詞レベルでの普遍性は、存在する」と私は考える。このUGの本質を構造主義・機能主義の立場で図示すると、次の図2のようになると思われる。この図は、「普遍的文法品詞修飾構造」を最も厳密に仮定図示したものであり、英文法などの特定の個別言語に限らず、殆どすべての言語が有する普遍的文法品詞修飾構造を示すものと考えられたい。図中、→の矢印は、「語順」ではなく、「修飾関係」を示す。

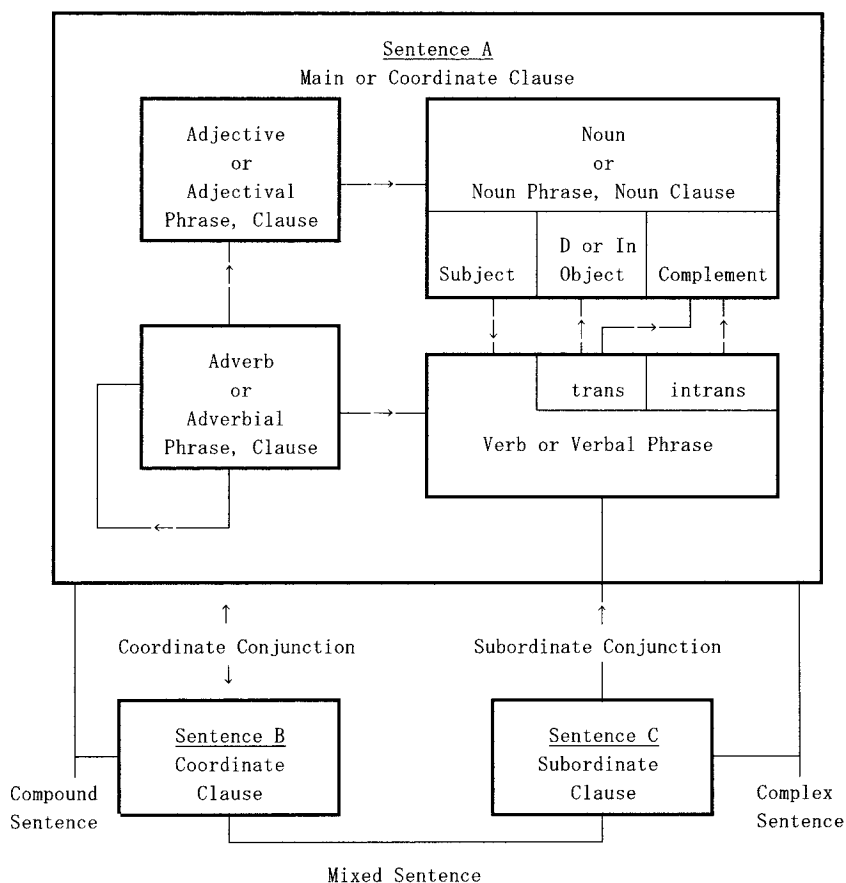


図2 普遍的文法品詞修飾構造

図2の中で、最も大切な品詞は、やはり「名詞、動詞、形容詞、副詞」の四品詞である。この四品詞こそUGの要となる。しかし、これ以外の品詞は、必要ないということはない。言語表現を更に複雑化し、より正確に豊かに表現するための手法とも言える。個別言語には、実に、多様性と芳醇さが混在した世界が存在するのである。ただし、UGレベルにおいては、「語順」は問題とならない。あくまでも「品詞の修飾関係構造」だけの世界なのである。それは、そもそもUGというもの、「語順が確定・設定される以前の問題」であるからである。

#### IV. 結 語

前章までの各キーワードを簡潔に纏めると、以下のようになる。

Greenberg = Typology (Dominant Three Types)

Chomsky = LAD

Saussure = Langage

Freud = Libido

Molecular Linguistics = Hormone

CS = Factorial (or Permutation)

ソシュールの“langage”をフロイト流に解釈すると、“libido”となる。また、BASICプログラムは、“langageをparole化するための階乗列生成能力”を意味する。その結果できあがったparoleが、更に社会的要因によって、標準化されたものがlangueであり、そのlangueを言語学の研究主題とすべしと主張したのが、ソシュールなのである。

以上から、UGの本質は、ソシュールの言うlangageのことであり、langageとは、「語順 (Syntax) 確定以前の混沌状態 (chaos)」を意味する。逆に、langageにchaosが存在するから、orderが可能となるのである。チョムスキーの主張するUGでは、「言語獲得以前に文法が存在する」としているが、これは、つまり「脳の中に初めから文法 (語順) が確定している」ことになる。しかし、それでは、「paroleを獲得できない事態」を引き起こしてしまい、langueも存在できなくなってしまふ。別の言い方をすると、UGとは、“Syntax確定以前の、階乗 (Factorial) の文字列”であり、“Modification Pattern” (品詞修飾関係構造) なのである。また、言語の本質を脳内ホルモン活動とする見方も、正しいと思う。

ところで、近年、心理学、特に臨床心理学の発達には、著しいものがある。近代、フロイトの精神分析に始まり、ここ10数年、心理学は、英米を中心として大きく発展してきた。なぜこのように心理学が、社会的に大きく評価されるようになってきたのであろうか。それは、やはり「実学」と

して、役立つ学問（プラグマティズム的発想）として見直されたことを意味するのではないであろうか。現代言語学において、例えば、チョムスキーを代表として、「言語能力は、先天的か、後天的か（apriori or posteriori）」といった問題が、未解決とされているが、実は、心理学（特に、発達心理学）においては、もうすでに解決済みの問題なのである。それは、「相互作用説」と呼ばれている。「相互作用説」では、遺伝と環境は相互に影響しあうものであり、両方共に重要要素なのである。遺伝が正しくなければ、そもそも十全に成長しないであろうし、また「環境閾値（いきち）説」のように、一定水準以上の環境条件が整わないと、本来持っている遺伝子形質が発現しないこともあると考えているのである（新井 2007：27）。しかし、私の個人的な見解としては、人間の本質は、正常に生まれた場合、遺伝よりも「教育などの環境」の方を重視したい。発明王エジソンの「天才は、1パーセントの靈感と99パーセントの努力（汗）である」という言葉の重さに、人生の意義と真理を感得するからである。

今回、学際的に、様々な分野からUGについて考えてみた。我々が、ともすると陥りやすい傾向は、「専門用語が異なるから、関係ないことを述べていると考えてしまう」ことである。同じ対象・内容を別の言葉（専門用語）で述べているのに過ぎないのかも知れないのである。つまり、「別の専門用語なのだから、別のことを述べている」と思い込んでしまい、「同一事項を別の観点から観察している」とは考えないのである。

いずれにせよ、本論文により、UG理論研究に新たな一石を投じることができたら幸いである。

#### 参考文献

(和書)

- 新井那二郎. 2007. 『図でわかる発達心理学』福村出版.  
 石黒昭博など. 1994. 『現代英語学要説』南雲堂.  
 石黒昭博など. 1996. 『現代の言語学』金星堂.  
 大木幸介. 1981. 『脳をあやつる分子言語』講談社.  
 加曾利実. 1980. 『ねびゅらす』「比較統語論序説－存在文の比較を中心として－」明治学院大学大学院.  
 加曾利実. 1985. 『女子聖学院短期大学英文学会会誌』「比較統語論序説(六)－コンピュータの利用(2)－」女子聖学院短期大学英文学会.  
 加藤正明など. 1996. 『精神医学事典』弘文堂.  
 『広辞苑 第五版』2006. 岩波書店.  
 『心理学辞典 (LogoVista 電子辞典版)』2001. 有斐閣.  
 ソシユール, フェルディナン・ド. (小林英夫訳) 1975. 『一般言語学講義』岩波書店.  
 外林大作など編. 2002. 『誠信 心理学辞典』誠信書房.  
 戸川隼人. 1998. 『ザ・BASIC/98』サイエンス社.  
 中村克樹. 2007. 『脳のしくみ』新星出版社.  
 『南山堂医学大辞典第19版 (LogoVista 電子辞典版)』2006. 南山堂.  
 本庄巖編著. 1999. 『脳からみた言語』中山書店.  
 マクニール, D. (鹿取廣人など訳) 1990. 『マクニール 心理言語学』サイエンス社.

- 丸山圭三郎. 1995. 『言葉とは何か』 夏目書房.  
涌井良幸, 涌井貞美. 2005. 『Excel で学ぶ物理数学』 ナツメ社.

(洋書)

- Chomsky, Noam. 1985. *Syntactic Structures*. Mouton.  
Comrie, Bernard. 1981. *Language Universals and Linguistic Typology*. Blackwell.  
Cook, V. J. and Newton, Mark. 1998. *Chomsky's Universal Grammar*. Blackwell.  
Croft, William. 2003. *Typology and Universals*. Cambridge.  
Greenberg, Joseph H. 1974. *Language Typology: A Historical and Analytic Overview*. Mouton.  
Greenberg, Joseph H. 1980. *Language Universals*. Mouton.  
Hawkins, John A. 1983. *Word Order Universals*. Academic Press.  
Kasori, Minoru. 1977. *Comparative Syntax*. Meiji Gakuin University (学士論文).  
Saussure, Ferdinand de. 1995. *Cours de linguistique générale*. Payot.  
Shopen, Timothy. 1985. *Language Typology and Syntactic Description I-III*. Cambridge.

(プログラミング言語)

- BASIC/98 Ver. 5. 2007. 電脳組 (Windows 95, 98, Me, NT, 2000, XP, Vista 対応)